

# 地上で実らなかった R. Browning の愛の詩<sup>うた</sup>

渡 邊 清 子

## はじめに

本学の紀要第3号では「R. Browning の詩に見られる愛の挫折」につき3つの作品を中心に書いてみた。即ち“Cristina”と“The Lost Mistress”と“Andrea Del Sarto”について Browning の恋愛観の一端を探ってみたのであるが、今回は少し角度を変えて、表題のもとに彼の有名な恋愛詩を2篇読んでみたい。最初に Sutherland Orr の言う“Love as conquering time”<sup>(1)</sup>をテーマとする“Evelyn Hope”にスポットをあててみることにする。

### (A) Evelyn Hope

F. G. Kenyon は“Evelyn Hope” (エヴリン・ホープ) を“ It has always been one of the most popular poems of Browning”<sup>(2)</sup>と紹介している。この作品は1855年に初めて *Men and Women* の中に所載され、そして、1863年に *Dramatic Lyrics* の中に区分されて載せられた。DeVane はその書かれた時のことにつき“ It is not known when *Evelyn Hope* was written, and I know of no event that might have suggested the poem. Because of the likeness in thought to *Cristina*, I should be inclined to put it among the earliest of the poems written for *Men And Women*.”<sup>(3)</sup>とのべてい

※本論文に引用される凡ての詩は下記の全集のVol. 3からのものである。但しp.22の“In a Balcony”はVol. 4による。

Sir F. G. Kenyon; (With introductions by); *The Works of Robert Browning*; Centenary Edition In Ten Volumes, (Ams Press, Inc., New York, 1966)

(1) Mrs. Sutherland Orr; *A Handbook To The Works Of Robert Browning* (G. Bell And Sons, London, 1927), p.223.

(2) Kenyon; *Vol. 3*, p. xvii.

(3) W. C. DeVane; *A Browning Handbook*, (Cornell University F. S. Crofts & Co., New York, Mcmxxxv.), p.193.

るが、彼はさらにこの詩は1846年にロンドンで書かれたのだらうと言っている。ともあれ Kenyon はこの詩がいかにも多くの人々に愛好されたかを次の如く証言する。Browning の死後間もなく *Pall Mall Gazette* が Browning の数多ある詩の中から50編を選び、それを一卷の詩集に編もうと計画し、人気投票を行なってみた。するとこの“Evelyn Hope”は2位の人気を集めた、と。<sup>(4)</sup> この詩は恐らく彼の恋愛詩の中でも比較的読み易く、人の心の琴線に触れる所が大きかったからかも知れない。

Arthur Symons もこの作品に対し、“…it is one of Browning’s sweetest, simplest and most pathetic pieces, and embodies, in a concrete form, one of his deepest convictions”<sup>(5)</sup>と賛辞を呈している。“Evelyn Hope”は文字通り地上で実り得なかった愛を、中年の男が、恋することを知らずに、はかなく散った純真な若い乙女を目前にして、託<sup>かこ</sup>っている詩である。彼はひたすらに、乙女を熱烈に愛し続けたのだが、そのことは彼女の全く関知せざる所であった。片恋を寄せたこの乙女への追悼の調べを奏する彼は、やはり Browning の人生観の核心である愛と死後の魂の不滅性を信じ、未来永劫の世界に希望をつなぐのである。しかしこの語り手である主人公は神は“creates the love to reward the love:” (st.IV) を確信しつつも、かなりセンチメンタルな情に流されていることは否めない。彼の切々たる lament は各連8行よりなる7連続きのものである。初めの2連では彼は読者である我々に話しかけ、その後は終りまで、Evelyn Hope に語りかけるという形となっている。

この恋人は初めに “Beautiful Evelyn Hope is dead! / Sit and watch by her side an hour.” (美しいエヴリン・ホープは死んでしまった!ひとときの間、彼女の側にいて見守ってあげよう。)と悲痛な声をあげる。

That is her book-shelf, this her bed;

(4) F. G. Kenyon; *ibid.*, p. xvii.

(5) Arthur Symons; *An Introduction To The Study Of Browning* (J. M. Dent & Sons Ltd. London, 1923) p. 122.

She plucked that piece of geranium-flower,  
Beginning to die too; in the glass; (11.3 - 5)

語り手は彼女の部屋に初めて入ったのだろうか。彼女が用いたであろう書棚や、彼女が今横たわっているベッドを、ある感動をもってみつめている。そして書棚の上に置かれているガラスのコップの中には、恐らく彼女が摘んで来たであろうゼラニウムの花が1本、枯れかかってさされたままである。彼女が死ぬ前の部屋そのままの姿が殆ど変えられていないらしい、と彼は思う。

Little has yet been changed, I think:

The shutters are shut, no light may pass

Save two long rays thro' the hinge's chink.

(11.6 - 8)

部屋の錠戸が閉ざされているので光が入らない。ただ2条の細長い光線が蝶番の間からさし込んでいるだけである、と Browning はまるで目の辺りにみているかのような描写をする。このことに関して Harrington もこの詩をよめばよむ程、その生々とした描写が我々の心を打つと言う。殊に Evelyn によって摘まれたゼラニウムの花が、ガラスのコップという我々日常茶飯事に用いるものの中で、枯れかけて、枕辺に残されていることに、彼は注目したのだろう。彼は更に花そのものにも注意を傾けて、“The geranium is not a poetic and romantic flower, and most poets would avoid it. But Robert Browning is writing of life as it is, and knowing how common geraniums are(or used to be)as house-plants, he puts in a piece of one of Evelyn Hope's geraniums as a true bit of the setting”<sup>(6)</sup>と述べ、我々はこのため Browning を honor するのだと賛えている。

語り手は2連目で我々に Evelyn Hope のことを紹介する。

Sixteen years old when she died !

(6) Vernon C. Harrington ; *Browning Studies*; (Richard G. Badger, The Gorham Press, Boston U.S.A.), p. 87.

Perhaps she had scarcely heard my name;  
It was not her time to love; beside,  
Her life had many a hope and aim,  
Duties enough and little cares,  
And now was quiet, now astir,  
Till God's hand beckoned unawares, —  
And the sweet white brow is all of her.

(st. II.)

彼女は僅か16才で死んでしまった！彼女は恋をするにはまだ若すぎ、私の名前を聞いたことはなかったであろう。彼女は希望や願を沢山持っていた。又軽いあれこれの務や心くばりをする事もあったであろう。ときには心穏やかに、ときには胸の高鳴るをおぼえたであろうが、ついに思いがけなく神様は彼女をお招きになってしまわれた——そして今は美しい白い額のみが残っている、と彼はなげく。しかし彼はすぐに亡き Evelyn に st. III から話しかけて行く。“Is it too late then, Evelyn Hope?”と。「もうあなたに私の愛を告知らしめることは出来ないのでしょうか。」と問いかける。「あなたの心は清く真実でした。あなたが生まれた時に、好運をもたらす星共が出合って大気と火と水とからあなたを作り出したのです。」(“What,<sup>m</sup> your soul was pure and true, / The good stars met in your horoscope, / Made you of spirit, fire and dew—”)「ところがその時、私があなただの3倍も年上でしたからとて、又私たち2人の世界が、かくも広く隔っていたからとて、それ故に2人は互いにかかわりなき者同志と言われねばならないのでしょうか。」(“And, just because I was thrice as old / And our paths in the world diverged so wide, / Each was nought to each, must I be told? / We were fellow mortals, nought beside?”)と、たずねずにはいられない。(st. III)

(7) このWhatは6行下にある …) must I be told の前に入れて、続くことに注意して読むとよい。

しかし彼は又次のように自答する。「いや、とんでもない！そんなことを言われる筈がない。天にいられる我が神は恵み深く、創造される力も強い。それ故、愛に報いるための愛をも造らせ給う。私はあなたに対する愛故に、常にあなたを求めます！」

No, indeed! for God above

Is great to grant, as mighty to make,  
And creates the love to reward the love:

I claim you still, for my own love's sake!

(st.IV,11. 25-28)

彼は更に続けて、「あなたを得るのはずっと先になるかもしれませんが。けれど私は待ちます。何度生まれ変わろうとも。幾世にも、幾世にも、渡って歩きましょう。そして多くを学び、且つ多くを忘れましょう。あなたが与えられる日が訪れるまで。」と彼の真心を披瀝する。

Delayed it may be for more lives yet,

Through worlds I shall traverse, not a few:

Much is to learn, much to forget

Ere the time be come for taking you.

(st.,IV,11.29-32)

29行目の“…for more lives yet,”は「何度も生れかわる間」という意味で、仏教の輪廻の思想と何か関係があるように見えるかもしれない。しかし Browning にそのような思想の影響があると考えるのは早計で、彼はただ普通に軽く用いる来世の思想を、拡張誇大にして書くことがあると言われている。このことについては後に少し述べることにする。

さて、st. V に至ると語り手は未来の世界でいつの日にか Evelyn と相まみえる日のあるを確信して次のように話しかける。

But the time will come,—at last it will,

When, Evelyn Hope, what meant (I shall say)

In the lower earth, in the years long still,  
 That body and soul so pure and gay?  
 Why your hair was amber, I shall divine,  
 And your mouth of your own geranium's red—  
 And what you would do with me, in fine,  
 In the new life come in the old one's stead.

この st. V 及び VI, と VII は, いつもの Browning の癖が出て, 句読点のあいまいさのため意味が非常に取り難くなっている。その点を Vernon C. Harrington<sup>8)</sup> も指摘し, 説明を加えているので, それを参考にして, 先ず st. V から解釈を試みたいと思う。

「しかしその時は来ます, — 終にはその時は必ずやって来ます。エヴリン・ホープよ, この地上で過ぎ去りし長い年月の昔のあなたのその清い, 快活な身と心が, 何を意味していたかを, あなたに告げる時が。」と彼はいう。つまり彼は未来の世に於いて, Evelyn に会った時, 彼女の美しさと清さの故に, 自分がどんなに地上で彼女を恋いこがれ, 待ちわびるようにさせられたかを話し, その時こそ彼女もその愛を受け入れてほしいと, 暗に願望を述べているのである。

一方彼はその時こそ, 彼女の髪がなぜ琥珀色であったか, 又彼女の唇が彼女の死の床の枕辺で今見ているようになぜ赤かったかを悟るであろう。又古い世が去り, 新しい世がやって来た時, 彼女が最後に自分をどう扱ってくれるかを, 自分は知るだろう, と独白する。

これから st. VI に移り全詩の山場へと向って行く。

(8) Vernon C. Harrington ; *ibid.*, p. 86.

"Stanzas V, VI, and VII would be plainer to us if the punctuation were such as we are accustomed to, *i.e.* with what he intends to say at last to Evelyn Hope enclosed in quotation marks, thus *e.g.* When, 'Evelyn Hope, what meant,' I shall say. The quotation ends with the fourth line of stanza V, and he goes on to say what he will learn. Then the quotation is resumed with stanza VI, 'I have lived,' I shall say, and continues to the middle of stanza VII. The remaining four lines are addressed to her now, and would be outside the quotation."

I have lived (I shall say) so much since then,  
Given up myself so many times,  
Gained me the gains of various men,  
Ransacked the ages, spoiled the climes;  
Yet one thing, one, in my soul's full scope,  
Either I missed or itself missed me:  
And I want and find you, Evelyn Hope!  
What is the issue? let me see!

上記 st. VIは石川林四郎の説によれば“imaginary conversation”であつて、1.29の“more lives”や1.23の“at last”等から推察してみると、流転の後に於ける経験をのべているかのようだが、「全体の構文や辞句の上からみると、一度現世を後にして再生した、単なる来世を想像しているものとしか思われぬ。」<sup>9)</sup>とすることになる。このことについては人により多少の意見の相異はあるが、これでよいと思う。Evelyn に対する彼の話しかけであるこの連の大意を以下のようにまとめてみよう。

「あなたにお会い出来たその時、私はあなたが逝ってしまつてからどんなに多くの有意義な生活をして来たか、又私自身を何度も棄て、どんなに変化させて来たかを、お話ししましょう。種々なる人々の求める功名や利得を得ました。さまざまな時代をわたり、諸国を遍歴し、大いなる収穫を得ました。でも私の魂の拡がりの中で一つ、唯一つ、満ち足りぬものがありました。それを私が見失つてしまつていたのか、それともそれが私を見失つていたのでしょうか。Evelyn Hope よ。私はその空間を満してくれるあなたを求めていたのです。今それがみつかったのです！さあ、その結果はどうなるのでしょうか？待って、みてみましょう！」と彼の深い想いについて述べて後 “I loved you, Evelyn,

(9) Kenkyusha English Classics, *Select Poems of Robert Browning*,  
With Introduction and Notes by Rinshiro Ishikawa, (Kenkyusha Publishing Co., 1925), p. 235.

all the while. / My heart seemed full as it could hold? / There was place and to spare for the frank young smile, / And the red young mouth, and the hair's young gold." (st. VII, 11.49-52) と熱烈な愛の言葉を迸ばしらす。

即ち「エヴリン・ホープ。私はずっと、いつもあなたを愛していました。私の心がこの浮世のことで一杯で、もうそれ以上愛のこと等、心にとめる余地がないと思われたのですか？とんでもありません。あなたに対する愛、あなたの素直な率直なほほえみ、みずみずしい赤い唇、そしてあなたの美しい黄金の髪を思う余地のない筈はありませんでした。」と言う程の意である。一般には以上の所までが来世にめぐり合った時に "I shall say" の内容となると考えられている。しかし例えば Harrington のようにこのst.VIIの始めから終りまでが今彼の目の前に死の床に横たわっている Evelyn に向かって話しかけている、とする人もいるので参考のため記しておく。

「死」と「時間」を越えた愛の存続を確信するこの中年の語り手は、彼を愛することも知らずに逝った乙女の枕辺にはべりつつ、いつか未来に於いて彼の胸中を彼女が理解してくれることを念じる。そして再会の日の思出になるようにと<sup>しば</sup>凋みかかっている書棚の上の花びらを一枚彼女の冷たくなった手に握らせる。Browning は哀感のこもる pathetic なこの詩の幕を次のような美しいことばで閉じる。

So, hush,—I will give you this leaf to keep :

See, I shut it inside the sweet cold hand !

There, that is our secret : go to sleep !

You will wake, and remember, and understand. .

では、どうぞお静かに—、あなたに

この花びらを一枚捧げましょう。

ほらね、これをあなたの美しい、冷たい

手に握らせてあげましょう！

そう、それは私達二人の秘め事。

おやすみなさい！

あなたはいつか目覚め、思い出し、

わかって下さるでしょう。

Thomas Blackburn はこの詩の中には “... the idea of meeting as destiny is worked out with much greater assurance.”<sup>(10)</sup>と指摘している。つまり一つの出会いが運命的なものだとする思想を押しすすめて行くと、例え死によって愛する2人の魂の結合が一時阻まれたとしても Browning の主張するように “it cannot prevent the consummation in some further existence, of the destined meeting”<sup>(11)</sup>とすることになるのは当然だという。この詩を Browning の結婚生活の晩年の作とする Blackburn は詩人がこの Evelyn の場合と反対に6歳も年上の妻を持つに至ったいきさつのことを必然的に考えていたであろうとしている。そして “Indeed the poet’s most sincere statement of ‘meeting as destiny’ is made in *By the Fire-side*, a poem which considers his relationship to his wife.” (p.77) と述べそれを証明している。

ところが Harrington に言わせれば、例え Browning が “I loved you, Evelyn, all the while,” といかに熱烈にうたい上げたとしても、我々読者はそれを詩人の生涯に何らかの関係が実際にあったものと直ちに考えるべきでないと言うのである。彼は “The reader is not to suppose that he has autobiography here. We are in contact with Browning’s intense personality, but poets in writing love-poems do not necessarily draw on their own definite experience. Such is the poet’s imagination.”<sup>(11)</sup>と、この詩に関するとやかくの説を戒めている。

(10) Thomas Blackburn; *Robert Browning, A Study of His Poetry*, (Eyre & Spottiswoode, London, 1967) pp. 76-77.

(11) Vernon C. Harrington; *ibid.*, p.87

更に Harrington は “We are not to understand from stanzas IV, V, and VI that Browning believes in metempsychosis. He does not give in his support to that doctrine.”<sup>(12)</sup>と詩人が輪廻の思想を持っていることを否定している。Dallas Kenmare も *Evelyn Hope* の詩の中にはこの地上で成就しなかった愛は死後の世界にて完成する (will be consummated)と書いてあるので、Browning は誤解されると、彼の弁護をしている。即ち “...theosophists have taken this poem, also *Cristina*, as evidence of Browning's belief in reincarnation, But Browning cannot be easily labelled. His attitude to theosophy and the doctrine of reincarnation, as his attitude towards spiritualism, was for the most part non-committal.”<sup>(13)</sup>まさにそうであると思う。しかし DeVane もこれを認めながらも、以下のような mild な意見をのべている。“The ideas concerning the immortality and invincibility of love are peculiarly Browning's, as is also the conception of life after death as a series of worlds through which we progress.”<sup>(14)</sup>そして Browning の愛の詩が特に愛好される理由をこのように述べる。“Its philosophy of love is perhaps the reason for its place in the popular estimation among the most admired of Browning's poems.”<sup>(15)</sup>

多くの批評家がこの詩を賞賛している中で Thomas Blackburn は “But if *Cristina* is immature then *Evelyn Hope* suffers from a certain incompleteness, as if Browning was not wholly committed to his theme, or not sufficiently conscious of the emotions that lay behind it.”<sup>(16)</sup>とかなり辛い点をつけている。それは前述のようにこの作品が詩人の結婚生活の晩年

(12) Vernon C. Harrington; *ibid.*, p.86.

(13) Dallas Kenmare; *An End to Darkness*, (Peter Owen Limited, London, 1962), pp.141-42.

(14)と(15)(17)は W. C. DeVane; *ibid.*, p.193.

(16) Thomas Blackburn; *ibid.*, p.77.

のものであるとするなら、Browning がその夫人のことを心のどこかに置いていた証拠ではないか、と Blackburn が考えていたからではなからうか。

Edgar Allan Poe は “Philosophy of Composition” の中で詩の長さは100行内外がよく、内容は美を創造 (create) するものでなくてはならぬ、そのために最も適切なthemeは「美しい女性の死」である、と言っているが、Evelyn Hopeはまさにその例にもれない。DeVane もそのことに言及して “The poem is upon the theme that Edgar Allan Poe thought the most poetic in the world, the death of a young and beautiful woman.”<sup>(17)</sup>と述べている。ともあれ確かに *Evelyn Hope* は sentimentalな詩ではあるが、愛する乙女の亡きがらを目前にして、切々として流露される男の真情には打たれるものがある。

## (B)The Last Ride Together

DeVane が “...the poem exhibits Browning’s rejected lover in a characteristic mood.” (p.202) と紹介している表題のこの詩を、筆者が読んだのは20年ばかり前のことであった。大山毅訳<sup>(18)</sup>のものであるが、深い感動を覚えたので後日英文で苦勞しながら読んでみたことをなつかしく思い出す。

Arthur Symonsはこの詩について “*The Last Ride Together* is one of those love-poems which I have spoken of as specially noble and unique,”<sup>(19)</sup> (Browning の愛の詩の中でもこの詩は特に、最も高貴で、誠にユニーク) であるとし、その優れている理由を次のように挙げている。“Thought, emotion and melody are mingled in perfect measure : it has the lyrical ‘cry,’ and the objectiveness of the drama. The situation, sufficiently indicated in the title, is selected with a choice and happy instinct: the very motion of riding is given in the rhythm.”<sup>(20)</sup>この作品は1855年

(18) 大山毅訳；「ブラウニング・男と女」(鷺の宮書房、1966.)

(19) と(20)はArthur Symons; *ibid.*, p. 123.

に *Men & Women* の中に所載、出版された。後に1863年に *Romances* とし、更に1868年に *Dramatic Romances* として分類所載された。しかしこの詩がいつ書かれたか、はっきりしないと言われる。各連11行で10連からなるかなり長い詩である。

この「最後の遠乗り」の st. I は初めの “I said—” を除くと、全部男が女に話しかけている言葉で、運命に対する忍従と、相手の女性に対する尊敬の念にみちている。

I said—Then, dearest, since 't is so,  
Since now at length my fate I know,  
Since nothing all my love avails,  
Since all, my life seemed meant for, fails,  
Since this was written and needs must be —  
My whole heart rises up to bless  
Your name in pride and thankfulness !

(st. I, 11. I—7)

この詩は一人の男が愛する女性に愛を拒まれた時、彼がいかにそれに対処し、いかにそれを考え、自己の中で消化発展させて行くかを追い求めてみる詩である。

前記の男の言葉の内容を少しみてみよう。彼は「私を愛していたくけないのでしたら、そして終に私は自分の運命を知った以上、又私の凡ての愛情が役に立たないものとなってしまったことを知ったからには、又私の生涯の目的があなたに愛されるためであった、と思っていたのに、それが全く無に帰してしまった以上、又このようになることが前から印されてあった天命であるのならやむを得ぬことでしょう。——だから私の心は高揚し、誇と感謝とをもって、あなたの名を祝福しましょう。」と潔く言う。Berdoe<sup>(21)</sup> が言うように、この男は恋

(21) Edward Berdoe; *The Browning Cyclopaedia* (George Allen & Unwin Ltd., London, 1931), p. 252.

人に断られても、彼は誇りを傷つけられることなく、怒りも感じないで彼女を祝福する心のゆとりを持った男らしい人である。

それから彼は言葉をついで「それではあなたが私に与えた希望をお返ししましょう。私はその希望だけを思い出として、胸に止めて置きたいのです。——そしてもしあなたが、お怒りにならないのであれば、もう一度だけお別れに最後の遠乗りには御一緒にでかけることを、お許しいたゞきたい。」と熱意をもって願う。(“Take back the hope you gave, — I claim/Only a memory of the same,/—And this beside, if you will not blame,/Your leave for one more last ride with me.”) (st. I, 11.8—11.)

St. IIに入ると男の語る言葉にはdramaticなmoodが漂い始める。「私の恋人は眉をひそめ、その誇りがためらいを見せた。しかし深く澄んだ彼女の黒い瞳の中に、同情心からくる優しさがよぎった時、私はひと息、ふた息つく間、釘づけにされてしまった。そして生きるか死ぬかの思いで返事を待った。すると彼女は「えゝ。」と答えたので、私は思はず「えゝ、よろしい。」と真似て繰り返してしまった。私の体中に再び熱い血が駆け巡り始めた。私の最後の希望は少くも、空しくはならなかった。」と切なる願いがかなえられたので彼はこゝでほっと息をついたのであろうか。Browning は以上のことを次のような詩行でしたゞめている。

My mistress bent that brow of hers;  
Those deep dark eyes where pride demurs  
When pity would be softening through,  
Fixed me a breathing-while or two  
With life or death in the balance:right!  
The blood replenished me again;  
My last thought was at least not vain:

(11. 12-18)

「そこで私と私の恋人はくつわをともどもに並べ、呼吸を合せて馬を走らせることになった。かくして私はもう一日だけ恋の至福に浸ることが出来るのだ。」と言うが、最後に「誰が知り得ようか、世界が今夜終るかも知れないということ。」と意味深長なことを付け加える。つまり作者は今この機会を逃がしたら次の機会が又再びくるとは限らぬ、という意で、今現在のこの1時の至福の貴重さを述べているのだと思う。

William Whitla も次の11.19—22を掲げて

I and my mistress, side by side,  
Shall be together, breathe and ride,  
So, one day more am I deified.

Who knows but the world may end to-night?

次のように評している。

“...the speaker is trying to catch something eternal, that he will be able to cherish in his memory during the temporal life that remains without his beloved. He chooses to search for it away from the world of men, on a last wild gallop:” そして1. 22について “The last line is ironic because in a real sense his world will end to-night when he is left to face life alone.”<sup>(22)</sup>と、この男が直面しなければならないこの “critical moment” に注意を傾けている。Berdoe はこの1. 22について “a line which no poet but Browning ever could have written.” (p.253)と賛辞を呈しているが、これはよく批評家達の注目を引く行である。

St. IIIはBrowningらしい奔放さで書かれているので、大変よみずらく、正確な意味が取り難い所が多い。従って種々なる解釈がなされているので st. IIIを全部こゝに示し、検討を試みたい。

(22) William Whitla ; *The Central Truth ; The Incarnation in Browning's Poetry* (University of Toronto Press, Canada, 1963), p. 90.

Hush ! if you saw some western cloud  
All billowy-bosomed, over-bowed  
By many benedictions—sun's  
And moon's and evening-star's at once—  
And so, you, looking and loving best,  
Conscious grew, your passion drew  
Cloud, sunset, moonrise, star-shine too,  
Down on you, near and yet more near,  
Till flesh must fade for heaven was here !—  
Thus leant she and lingered—joy and fear !  
Thus lay she a moment on my breast.

(st. III, 11.23-33)

この連を文字通り訳してみると、何を言おうとしているのか全くわからなくなる。それ故、詩の内容を平易な言葉でパラフレーズしながら意識をしてみようと思う。

先づ主人公である男は「静かに！と注意を求めているのであろうか。それから彼は恋人に話しかける。「波濤のように大きく盛り上がったり、沈んだりする起伏のある西空の雲が、太陽や月や、夕べの空にまたく星から、一緒に、多くの恵みを受けているのを、感動をもって、もしあなたが打ち仰いだならば、——そして更に又、もしあなたが至上なるものを、精神をこめて、じっと見詰めているうちに、あなたがあなたの情熱により、雲や日没、月の出、星の輝き等を、御自分の側に、ぐんぐん引きつけているのだ、ということが、次第に意識し始められるならば、もう天国は今ここに到来して来たのも同然です。もしそうであるなら、我ら個人の肉体のことは全く問題にならなくなってしまうでしょう。」と。

相手の女性は暫し心を傾け、そのまゝじっとしていた。その一瞬は私にとって何たる歓喜、何たる戦きの時であったことか！かくしてその一瞬だけ、彼女

は私の中にあつた、と男は言うのである。以上がもってまわつたようなst. IIIのひと通りの解釈である。しかしこの終りの二行については種々なる異説があつて、さだかでない。たゞその中でなるほどと思われるV. C. Harringtonの解釈があるのでここにあげておく。彼は次の様に説明する。

“The lover asks the lady to take just one more ride with him, which she agrees to do. He helps her on her horse, (this is the point in stanza III, cf. the last two lines when he is helping her on), and they begin to ride.<sup>(23)</sup>”

つまり彼女が彼と遠乗りにてかけることを承知してくれたので、彼は紳士らしく彼女が馬に乗るのを手伝つた。彼女はその時、意識的であつたか否かは不明であるが、とにかく彼の胸に一寸寄りかゝつた。それ故彼は歓喜と戦きをおぼえ、“Thus lay she a moment on my breast.”と感動の心を表明しているのだとする。

それからst. IVに至ると二人がくつわを並べて出発する所に入る。“Then we began to ride.”その時男の心は、長い間くるみ込まれてゐた巻物が、さらさらと解け、風の中に蘇つたように、生き生きとはためくように、さわやかに開かれて行つた。(“My soul / Smoothed itself out, a long-cramped scoll / Freshening and fluttering in the wind.”)そして過ぎ去りし事どもを黙想する。

Past hopes already lay behind.

What need to strive with a life awry?

Had I said that, had I done this,

So might I gain, so might I miss.

Might she have loved me? just as well

(23) V. C. Harrington; *ibid.*, p. 97.

She might have hated, who can tell!

Where had I been now if the worst befell?

(11. 37-43)

「過去の希望はもう終りをとげた。何故我は己の思いの外に、ことが曲がって行ってしまったとて、思い患うか？あゝ言えばよかった、こうすればよかったと思つたとて、そうしたからとて果たして利益になつたであろうか、いや、それは失敗に終つたかもしれないではないか。彼女がもしかしたら、私を愛してくれたかもしれないって？ いや、反対に憎んだかもしれないではないか。誰にそんなことがわかるものか。それどころか、最悪の場合、最後の願いさえ聞きいれて貰えず、今頃どうなっていたかわからない。」と思ひ、彼はぞつとしたに違いない。それなのに今現実に、彼は馬上ゆたかに、彼女と共に轡を並べ馬に跨つて行つている。(“And here we are riding, she and I.”) l. 44彼の感激はさこそと、察せられる。

次に彼はst. V. でみられるように、馬を進めながら、Sutherland Orr の言う“sense of resignation”即ち運命を甘受する彼の諦観の境地をみせる。彼は先ず自問する。「言葉や行いで失敗するのは、はたして自分だけであろうか？ というのはすべての人皆は苦勞するが、誰れが成功するというのか？」(“Fail I alone, in words and deeds? / Why, all men strive and who succeeds?”) 彼らは馬を更に進めた。(“We rode; it seemed my spirit flew, / Saw other regions, cities new, / As the world rushed by on either side.”) 「我が心は天翔ける思であつた。両側の世界が走りすぎて行く時、知らぬ別の世界が、新しい都市が、次から次へと見えて来た。私は思ったが、自分と同じように、すべての人は皆あくせくと働いている。しかし彼らの中の何人しか成功していない。それでも彼らは失敗や不成功にめげず、耐え抜いている。(“I thought,—All labour, yet no less / Bear up beneath their unsuccess.”) これから以下4行にはBrowning ばりの思想が点滅しながらあ

らわされてくる。“Look at the end of work, contrast/The petty done, the undone vast,/This present of theirs with the hopeful past!/I hoped she would love me; here we ride.” (11. 52-55)

上記の詩行によれば、彼是我々が成就した仕事の結果を見よ、と注意をうながす。即ち我々のなし遂げた些いな事柄と、我らがなし遂げ得なかった大きい事柄と比較してみよ、と言うのである。換言すれば、小さな薄っぺらな望みを成就させて満足するよりは、大いなる望みを持ちながらも、それを成就し得ず、なおそれに向かって努力する方を優るとするのである。端的にBrowningの真意を言えば、「完成された小なるものより、完成されざる大なるものこそ勝る」と言うことになる。従って我らは人々の希望にみちた過去と、不成功に終わった彼らの現状を比較してみるとよい。努力しても報いられる人は少ないのである、と考える。それで最後の行では男らしいあきらめの態度を示す 男は恋人に愛して貰いたいと長い間、願っていた。しかしその願はかなえられなかった。だがすべてが完全に拒まれたのではなく、今二人は男の最後の願い通り、一緒に馬に乗って駆けているではないか！多くの人々の失敗に比べれば必ずしも、自分だけが、不幸であるとは言えないではないか、とむしろ自分に与えられた運命を甘受し、拒まれた愛の痛手を癒そうとする。

Stopford A. Brooke は Browning の愛に関する多くの詩について次のようにべている。“…his imagination was more intellectual than passionate; …while he felt love, he also analysed, even dissected it, as he wrote about it.”<sup>(24)</sup>つまりBrowningの詩的想像は、多くの場合熱情的であるよりは智的であった、ということである。又彼が愛を感じそれについて書くときでも、それを分析し、解剖のメスさえ入れた、と言う。正にそのとおりで彼は愛以外の凡てを忘れて、それと正面から取り組み、夢中になるとい

(24) Stopford A. Brooke; *The Poet of Robert Browning* (Thomas Y. Crowell Company, New York, 1902), p. 244

うことは、まれであると言ってよいであろう。例えば先に読んだ *Evelyn Hope* の場合と同様に、この「最後の遠乗り」においては、多少忘我の境に陥っているらしき所はあるが、男は彼の側にいるその女性のことよりも、自分自身の思い出の中に埋没してしまっている。現実の問題として、この女性は、共に馬を並べて乗っている相手が、話しかけもせず、無言の行に耽つていられたら、さぞかしうんざりさせられたであろうと想像出来る。St.Ⅲは勿論のことSt.Ⅵ以後一層その感を強くさせられるばかりである。

St.Ⅵにいたると、彼の黙想は以下のように続く。

What hand and brain went ever paired?

What heart alike conceived and dared?

What act proved all its thought had been?

What will but felt the fleshly screen?

(11. 56-59)

いかなる手と頭脳が、相伴うていただろうか？／いかなる心が想を抱いたばかりでなく、それを敢えて実行したのであろうか？／いかなる行為が、心に抱いた想のすべてを、実証し得たのであろうか？／肉体の弱さに妨げられて、いかなる意志が、その目的をなし遂げられなかったというのであろうか？と。<sup>(25)</sup> 男はふと我に帰り、隣りで馬を走らせている女性をみると、彼女の胸は波立ち、盛り上がっているのであった。されど彼は又前の黙想の状態に戻って行く。

There 's many a crown for who can reach.

Ten lines, a statesman's life in each !

The flag stuck on a heap of bones,

A soldier's doing! what atones?

(25) イエス・キリストが十字架にかゝる前夜、ゲツセマネの庭の中で弟子たちに「誘惑に陥らないように、目をさまして、祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱いのです。」とお仰せられた。このことをBrowningは考えていたのだろう。

(マタイ伝 26:41) 参照

They scratch his name on the Abbey-stones.

(11. 61-65)

世の中には、手をのばして、それに手を届かせ得る者のためには、王冠は沢山ある。(作者の皮肉がたっぷり含まれている詩行である。)又僅か十行からなる伝記の中の各行には著名な政治家の名前しか永久に留められていないではないか。又多くの骨の上に打ち立てられた旗がある。それは兵士の功勞のしるし。だが彼らはそのためどれ程の償いを受けたであろうか? 兵士はただその名を、ウエストミンスター寺院の墓石に刻まれるのみ、と同情を寄せる。そして最後に、失礼な言い分ながら、とわざと断って、私の遠乗りこそ、これらより遙かに勝る。(“My riding is better, by their leave.”)と胸を張る。Browningはこの男にとってこの愛する女性に許されて、共にいられるこの瞬時こそ、世のすべての榮譽に勝る価値あるもの、と言いたかったのである。

次のSt.VIIに移ってみよう。

What does it all mean, poet? Well,  
Your brains beat into rhythm, you tell  
What we felt only; you expressed  
You hold things beautiful the best,  
And pace them in rhyme so, side by side.

(11.67-71)

この連では以上の如く彼は詩人に向かって尋ねる。詩人たる者のなす、すべてのことに、いかなる意味があるかと。そう、あなたの頭脳はリズムカルに働く、あなたは我らの感じたことのみを告げる。あなたは美しきものこそ、最高の善とみなす。<sup>(26)</sup>そして美しきものを、韻を踏ませつゝ並べたてる。詩人

(26) John Keats が“Ode on a Grecian Urn”を終わるに際して、“Beauty is truth, truth beauty”と力強く真言している。それをBrowning は心に止めていたのであろうか。

の役割はたしかにたいしたものである。いや、それどころか役にたつこと大であるとほめる。(" 'T is something, nay 't is much: ") と。しかしすぐ " ... but then, / Have you yourself what 's best for men? " 即ち、あなたはあなた自身、人間にとり最善のものを持っているのでしょうか? と反問する。そして " Are you—poor, sick, old ere your time — / Nearer one whit your own sublime / Than we who never have turned a rhyme? " (「詩人よ、—あなたは貧しく、病弱で、年より老けておりますか—まだ一度も詩等、作ったことのない私達より、あなたはあなたの言う崇高さに、少しは近づいていますか。)」と迫る。そして突然、場はずれた調子で「歌えよ、馬に乗るのはまさに歓喜! 私は馬に乗るのです。」という。("Sing, riding 's a joy! For me, I ride.")

St. VIIIではまず「偉大なる彫刻家よ—」と話しかける。「そう、あなたは20年という長い間、芸術に身を捧げ、その奴隷でおられるのですね。そしてそれがあなたのヴィーナス。私たちはそれよりも、流れを渡る向こうにいる少女の長い、裾をからげた美しい姿に目を奪われます。それだのにあなたは芸術の奴隷として黙従しておられる。私は何で不平を申しませうぞ? 」と彼自身の幸を、彫刻家のそれとくらべて、暗にほめめかす。

And you, great sculptor — so, you gave

A score of years to Art, her slave,

And that 's your Venus, whence we turn

To yonder girl that fords the burn !

You acquiesce, and shall I repine ?

(11. 78—82)

それから彼は続けて、音楽家に話しかける。『音楽家よ、何ですって、あなたは、楽譜の中に埋もれて白髪になり、何一つもう言うことはない、とおっしゃるのですか。それだのにあなたの友人は「彼のオペラの調べと、意図する所は

偉大である。しかし我々は彼の音楽はもはや流行に立ちおけていることを知る。」という賛辞しか与えてくれないのですか!』と彼の努力を惜しむ。そして男は我が身を振り返り、「私は私の青春をかけて恋をした。しかし手短かに言えば、その結果は、彼女と遠乗りに一度行くことが許されただけである。」と悲痛な思いを述べる。

What, man of music, you grown grey  
With notes and nothing else to say,  
Is this your sole praise from a friend,  
“ Greatly his opera’s strains intend,  
“ But in music we know how fashions end !  
I gave my youth; but we ride, in fine.

(11. 83 - 88)

前述の67～88行までのところをまとめてみると次のようになる。男は詩人に我々より高きsublimeな境地に達し得たかと、又彫刻家や音楽家には、彼らが目標としていた所に到達し得たかと聞いてみたが、否という解答だった。

結局すべての人、労せど、報いられる者少し、という結論が出た。この男も恋に破れたかに見えるが、この詩の終りには永遠に通ずる解決の道を見出すのである。つまりBrowningは例えそれが拒まれた愛であるにせよ、愛の経験はすべての芸術よりまさるとするのである。

これに類似する彼の思想はすでに1853年の夏に書かれた“ In a Balcony ”という劇詩 (one act piece) の中に色濃くあらわれているのをみる。そのことに一寸触れておくことにする。

以下にのべる所は、第三部・661～667行にわたって、美貌で若々しい青年Norbertが恋人Constanceに話す彼の芸術観である。NorbertはConstanceに「あなたが書物をあらわしたり、絵を描いたりすればどんなに素晴らしいでしょうに!」とすゝめられた時、彼は長い台詞に託し、彼の見解をのべる。人は書籍や絵を描くと、自分の書いた書物や絵に執着し、それを愛し、恋人を愛する

ことを忘れるものである。僕ら二人はこの上もなく幸せである。だから現在あるがまゝの状態以外のことを求めるのは愚であるとさす。

We live, and they experiment on life —  
Those poets, painters, all who stand aloof  
To overlook the farther. Let us be  
The thing they look at !

(“ In A Balcony ” 11. 664-7)

Norbertは、「僕らは生きている。血の通った生活をしている人間である。詩人や画家、芸術家は皆超然としていて、より以上のものを望み、離れた所に孤独に生きている。彼等が僕等を眺めて、心に抱く映像の、実体になってみせてやろうではないか。つまり僕らは実際に恋人同志の本体であればよいのではないか。」というのである。Browning はここでも芸術家が作り出す映像より、<sup>まこと</sup>真なるそのものの、偉大さをみよ、と説くのである。

少し横道にそれたが、元の轍に戻り、「最後の遠乗り」のSt. IXを読んでみよう。

Who knows what 's fit for us? Had fate  
Proposed bliss here should sublimate  
My being—had I signed the bond—  
Still one must lead some life beyond,  
Have a bliss to die with, dim-described.

(11. 89—93)

何が私達にふさわしいかを誰が知るであろうか？この地上に於ける至福が、僕を醇化させ、昇華させると、運命がたとえ申し出たとしても、例え私とその契約書に著名したとしても、あの世の生活をしなければならない。とすると、死ぬ時には漠然としていても良いが、来世に甦った時には、靈的な至福 (spiritual bliss) を意識することが出来ると思わねばならない。そうありたいもの

だ、と男は馬にゆられつゝ思う。男は更に下記の如く思いを深めて行く。

This foot once planted on the goal,  
This glory-garland round my soul,  
Could I decry such ? Try and test !  
I sink back shuddering from the quest.  
Earth being so good, would heaven seem best ?  
Now, heaven and she are beyond this ride.

(11. 94—99)

以上の6行については学者仲間で解釈の相違があり、明瞭でない所が多くて困ったが、出来る限り意識をこゝみて、作者のいわんとする所に近づいてみたい。

この足がひと度、目的地についた時、この光荣ある花環を私の霊のまわりにかかげた。がそのような至福 (bliss) を、あの世に行っても意識することが出来るであろうか。試して、やってみようか！私はこの問を発して、おのゝきつゝ、尻込みをする。この世がかくの如く素晴しく良きものであるなら、来世はこれ以上に良き所と言えるであろうか。私の生涯は恋に破れ、失敗に終わったが、今彼女と遠乗りに来ている。天国と彼女はこの騎馬行の彼方にある至福をあたえる存在として私に希望をあたえてくれている。

これが大体の意であるが、例えこの世で彼女と結ばれることが不可能であっても、来世に於いては、芽生えた愛は実る、というBrowning特有の思想が、“Evelyn Hope”の場合と同様に、暗示されていると思う。

St. XにはSt. Iの場合と同じように、しばらく振りて抒情的な要素が見えてくる

And yet—she has not spoke so long !  
What if heaven be that, fair and strong  
At life's best, with our eyes upturned

Whither life's flower is first discerned,

We, fixed so, ever should so abide ?

(11. 100—04)

しかし、思えば、彼女と余り話す機会はなかった！と男は歎息する。人生の最高の時に、美しく、力強く、恋人(人生の恋の花)を見そめ、目をあげて、いつまでもそのまゝ、そのようにして、生のよろこびに浸っていることが出来るとしたら、それこそ、それが天国であると、考えたらどうであろうか、と男は思う。

What if we still ride on, we two

With life for ever old yet new,

Changed not in kind but in degree,

The instant made eternity, —

And heaven just prove that I and she

Ride, ride together, for ever ride ?

(11. 105 - 110)

程度には変わりがあるとしても、永久に種類が変わることなく続き、しかも初めの時のように、永久に新鮮な気持で、我ら二人がいつまでも馬に乗り続けるとしたなら、又一瞬のこの幸せを永遠化することが出来るとしたなら、天国とは私と彼女が遠乗りをする事である、と結論する。そして彼は今あたえられている一瞬を、無駄にすることなく、永遠をその中にみようとしているのである。彼と彼女が共に永久に馬に乗り続けることが出来るなら、そこに天国があるので、彼はそうありたいと、ひたすら願い続ける所でこの詩は終る。

## む す び

この「天上で結ぶ恋」はBrowningの好んで取り扱うテーマである。、初めにのべたように、これは甚だ困難な詩であるが、かなり高く評価され、よく読まれていると言ってよいと思う。

最後にこの詩についてThomas J. Collins 及び Dallas Kenmare がわか

り易く批評している箇所があるので参考になるかもしれないと思い、引用しておく。

1. Thomas J. Collins の説<sup>(27)</sup>

“... the speaker [in ‘The Last Ride Together’] is not very realistic: he is unwilling to face the termination of the ride, which will efface the lingering grasp he still has on his ‘infinite moment’; and he wishes that the ride could continue forever so that ‘the instant’ could be ‘made eternity’.”

2. Dallas Kenmare の説<sup>(28)</sup>

“In Browning’s love-poetry it is almost invariably the man who comes to understand the mysterious self-fulfilment of love in spite of apparent failure, the great truth that no real love is ever lost, that in the emotion itself lies the truest fulfilment. The heights, depths and riches experienced by the lover in his own inner world cannot really be increased by any consummation in actuality, nor can they really be minimised by the tragedy of loss. This philosophy—truly optimistic, since it robs all actual circumstances of their power—is perhaps best expressed in *The Last Ride Together*.”

---

(27) Thomas J. Collins; *Robert Browning’s Moral, Aesthetic Theory 1833—1855* (University of Nebraska Press, Lincoln 1967), p. 134.

(28) Dallas Kenmare; *An End to Darkness* (Peter Owen Limited, London, 1962), p. 136.